

ベルナルド・ベッロット『エルベ川右岸から見たドレスデン』1748年

曲目解説

Aria

アリア（ゴルトベルク変奏曲）

Johann Sebastian Bach（1685–1750）　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

曲目解説

Aria アリア（ゴルトベルク変奏曲）

Goldberg Variations, BWV 988 — Aria ／ ゴルトベルク変奏曲 より アリア

Johann Sebastian Bach（1685–1750） ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

出版	1741年ごろ、ニュルンベルクで『クラヴィーア練習曲集』第4部として
原曲の編成	2段鍵盤のチェンバロ
調・拍子	ト長調・4分の3拍子（サラバンド）
この楽譜	Mutopia Project（CC BY-SA 3.0）の右手を笛、左手を伴奏にした

作曲者

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、ドイツ中部のアイゼナハに、代々音楽家を出した家に生まれました。ヴァイマルの宮廷オルガニスト、ケーテンの宮廷楽長を経て、1723年からはライプツィヒの聖トーマス教会のカントル（音楽監督）を務め、その地で生涯を終えました。

ケーテンの宮廷（1717〜23年）は、礼拝に手の込んだ音楽を用いない改革派の宮廷だったため、バッハはこの時期、器楽曲に力を注ぎました。無伴奏ヴァイオリンや無伴奏チェロのための曲、『ブランデンブルク協奏曲』、『平均律クラヴィーア曲集』第1巻などは、この時期に生まれています。

生前は、作曲家としてよりも、オルガンの名手として知られていました。没後はしばらく忘れられましたが、1829年にメンデルスゾーンが『マタイ受難曲』を蘇演したことをきっかけに、19世紀に再評価が進みました。

曲の成り立ち

1741年ごろ、バッハは『クラヴィーア練習曲集』の第4部として、「2段鍵盤のチェンバロのための、アリアとさまざまな変奏」を出版しました。のちに『ゴルトベルク変奏曲』と呼ばれる曲集です。

この名は、バッハの伝記作者フォルケルが伝えた逸話によります。不眠に悩んでいたロシアの外交官カイザーリンク伯爵のために、伯爵に仕えていた若いチェンバロ奏者ゴルトベルクが、眠れない夜にこの曲を弾いたというものです。ただし、この話を確かめる資料はなく、ゴルトベルクも当時はまだ十代前半でした。

アリアの旋律は、バッハの2番目の妻アンナ・マグダレーナの音楽帳（1725年に始まる）にも書き込まれています。曲集は、このアリアで始まり、30の変奏を経て、最後にもう一度同じアリアで閉じます。

曲調と聴きどころ

アリアは、ゆったりした3拍子の舞曲サラバンドの形で書かれています。2拍目に重みを置く、落ち着いた足取りです。右手の旋律には、トリルや前打音などの細かな装飾がちりばめられ、まるで歌い手が飾りながら歌うようです。

曲集の30の変奏は、このアリアの旋律ではなく、左手の低音の進み（ソ・ファ♯・ミ・レ…と下りる32小節の骨組み）と、その和音をもとに作られています。アリアを吹くときは、この低音の歩みを感じながら吹くと、曲の形がよく見えてきます。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜8	主題。低音がソ・ファ♯・ミ・レと下り、旋律は装飾をちりばめて静かに歌い出す
9〜16	ニ長調へ向かい、16小節で前半を閉じる。くり返す
17〜24	後半。ホ短調へ移り、陰りのある響きになる
25〜32	16分音符の流れで、ト長調へ戻り、静かに閉じる。後半をくり返す

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ト長調

ソを主音とする長調で、調号は♯が1つ（ファ）。前半はニ長調（属調）へ向かい、後半はホ短調（平行調）を経て、ト長調に戻ります。

拍子　4分の3拍子

サラバンドは、2拍目に重みのある、ゆったりした3拍子の舞曲です。1拍目より2拍目を少し長めに感じると、サラバンドらしい足取りになります。

装飾音

トリル、モルデント（短いトリル）、前打音など、細かな装飾がたくさん付いています。笛では、
まず装飾を外して旋律の骨組みを覚え、あとから装飾を加えると吹きやすくなります。

篠笛の楽譜と調について

　同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ト長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。変ロ長調（原曲より短3度上）、チューナーの基準 A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026